

— 不変のルールに学ぶ —

今から2200年程前(BC221年)中国全土を初めて統一した始皇帝は、生母と養父の裏切り等もあり、極端な人間不信からくる徹底した性悪説に基づいた統治を行いました。統一した後も、匈奴等の夷狄から国を守る為に築いた万里の長城は、その中央集権の強大さを窺知る反面、人を信じる事の出来ない孤独な独裁者の心理を感じさせる長大な遺物でもあります。その絶対的権力者の始皇帝が、後生最も欲したのが「不老不死の薬」であったのも有名な史話です。しかし、そうしたものがこの世に存在する筈もなく彼は49才で死に、そして、難攻不落の筈であった秦は、始皇帝の死後わずか3年で内部から崩壊してしまいます。

明の万暦年間(1573～1620)に洪自誠が書いたと言われる「菜根譚」の中に

名利は飴のごとく甘けれども、一想死地に到らば便ち味は嚼蠟の如し、故に人、常に死を憂え病を慮ばからば亦、幻業を消して道心を長ずべし

(名声とか利益というようなものは、ちょうど飴のように甘いもので誰でもそれを求めるが、死を前にした時その味は蠟を噛むようなもので味気がなくなってしまうものだ。平素から死を考え病の時のことをいつも思い出せば、名声とか財産は幻の様なものと気づく筈)と言っています。

最近、一部の隣国の言動を見るにつけ、人も組織も国家も有限の生命であるという絶対的真理に気づかず、また、正しい歴史に学ぶ事も無く、自国の国益のみを主張し、自国の過去の過や受けた恩を省りみる事もなく、史実を歪曲した他国の過去の非を執拗に非難し続ける様は冷静な第三者から見て果してどう映っているのでしょうか。

人の生き様は、究極的には、どの様な死生観を持つかで決まると私は考えています。

そしてその死生観は、正しい宗教や歴史から学ぶところが大きい様に思います。

リーダーたる人が、青壮年期にそうした根源的人間観を養わないままに組織や国家の指導者となっていく今日の時代は、我利我欲の争い事をことさら増大し、あたかも餓鬼道の世界を見てる様な気がしています。

この世に存在するものは、いつか必ず消滅する。

我々が住むこの地球という星でさえそうで、まして国家や組織や人の存在など、ちよいの間の存在でしか無い訳にもかかわらず、自分や自国の利害に汲汲とする様は、果して後世にどの様な評価として伝わってゆくのでしょうか。

「道徳」という言葉があります。

「道」とはルールにあたります。

天には天のルールがありこれを「道」といいます。

地には地のルールがありこれを「理」といいます。

人にも人のルールがありこれを「義」といいます。

そして天地のルールを網羅した根本的な天地宇宙のルールを「天」といいます。

こうしたルールを知り、素直な心で「道」を受け入れて行くことを「徳」といいます。

文明の進化がもたらした現代社会は大変便利な反面、真偽含め様々な情報が一瞬にして世界を飛び交い、日々加速する忙しい生活の中で、深く物事を考え、本質的な価値観に基づいて判断する環境が奪われている気がします。

我々は、意識的にそうした時空間を自分で持つ努力をし、不変の「道徳」という判断基準を持つ努力をしたいものです。

徳真会グループ
理事長 松村 博史



撮影場所：兼六園(石川県金沢市)